

<円卓会議>議論のはじまり。まずは・・・

「市民生活において、芸術は必要なのだろうか？」

という基本的な命題に対して。

「芸術とは、(暮らしの中に)文化を創造する基盤である」(蔵委員)

▼ では「文化」とは何か？

「文化とは、人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体であり世代を超えて伝承されていくもの。」(デジタル大辞泉)

↓ 「文化」と「芸術」の関係とは？

「市民生活において、築き上げられ、伝えられ、いま存在しているもの。それが『文化』であり、その文化を創造する基盤のひとつが『芸術』である。」

↓ 「文化」とは人間生活そのもの。であれば・・・！

「芸術の存在しない人間社会を私たちは想像できるでしょうか？」

・・・できません。絶対に！」

なぜなら「芸術」を否定することは人間の築き上げてきた「文化」を否定すること。

これが、<円卓会議>の導きだした答え。

この前提条件からすべては始まります。

・ 札幌市における、文化芸術施策の経緯とそこから見えてくる問題点

「世界とむすぶ高い文化のまちにしましょう」(昭和38年『札幌市民憲章』)



「札幌の創造性を高める」「未来の担い手をはぐくむ」「広く世界と結ぶ」

(平成9年『アンビシャス札幌21』)



「市民が心豊かに暮らせる文化の薫り高き札幌のまちづくりを目指す」

(平成19年『札幌文化芸術振興条例』)



「札幌の文化芸術を育てる・つなぐ・発信する・継承し、活かす」

(平成21年『札幌市文化芸術基本計画』4つの基本目標)



札幌市民憲章が制定されてから約半世紀。

年々施策が「総花化」し、重要なポイントが見えづらくなっている！

文化芸術施策はなぜ「総花化」するのだろうか？

それは・・・↓

1、過去の施策についての十分な総括・検証ができておらず、

2、社会のトレンドの変化に未だ対応できていない！

のではないかと円卓会議は考えます。

1、過去の施策の総括・検証について

札幌市では、「行政評価」という名で、毎年、新まちづくり計画に位置付けられる全ての「施策」と、それらを具体に実現するための「事業」の評価を実施している。

行政評価制度

お知らせ

- 行政評価委員会による各評価対象団体への再ヒアリングを実施いたします。(平成22年10月13日掲載)
- 平成21年度施策に対する市民満足度調査の結果を掲載しました。(平成22年3月31日掲載)
 - 調査結果 (PDF:545KB)、調査概要 (PDF:16KB)、調査票 (PDF:58KB)
- 平成21年度評価指標達成度調査の結果を掲載しました。(平成22年3月31日掲載)
 - 調査結果1 (PDF:726KB)、調査結果2 (PDF:480KB)、調査概要 (PDF:85KB)、調査票 (PDF:90KB)

行政評価制度とは

行政評価制度は、

1. 施策や事業の定期的な診断ツールです。

市が実施する全施策及び全予算事業を対象として、定期的かつ継続的に実施結果の検証を行うとともに、課題を明らかにし、今後の方向性を検討します。
2. 自己改善ツールです。

事業を実施している立場で主体的に施策や事業を評価し、その結果を自らの仕事に活かしていきます。
3. 市民の皆さんへの情報提供ツールです。

評価調査は公表し、市政運営の現状や課題、さらに見直しを検討過程を市民の皆さんに積極的に情報提供していきます。

札幌市 HP 「行政評価制度」トップページ
<http://www.city.sapporo.jp/somu/hyoka/index.html>

札幌市の行政評価
 平成21年度 行政評価の結果(概要)

行政評価とは?

- 自己や事業の定期的な診断ツールです。
- 自己改善ツールです。
- 市民の皆さんへの情報提供ツールです。

事業は「計画→実施→評価」のサイクルで進められ続けています。行政評価は、そのサイクルの「評価」の段階を担う仕組みです。事業の進捗や進捗の遅れ、遅れの原因、改善の方向性などを、市民の皆さんから評価・検証を行います。

行政評価の方法

- 1次評価**

全ての予算事業とその上位目標である施策について、事業担当者が評価調査を行います(自己評価)
- 2次評価**

1次評価に対して、事務局で2次評価を実施します。2次評価は定量的な評価に基づき、独自の「結果確認シート」で評価を行います。
- 外部評価**

市民の皆さんに客観的・透明性を高めるため、「札幌市行政評価委員会」が外部の専門家から構成の委員会で評価を実施しています。

行政評価の流れ

```

    graph TD
        A[1次評価] --> B[2次評価]
        B --> C[外部評価]
        C --> D[改善・見直しの検討]
        D --> E[予算への反映]
        E --> F[計画]
        F --> G[実施]
        G --> A
    
```

評価結果の概要
<http://www.city.sapporo.jp/somu/hyoka/kekka/pdf/h21gaiyou.pdf>

行政評価の結果(概要)

平成21年度行政評価の結果は、2次評価では47事業で16億6千万円、外部評価では3事業で3千万円、合計で16億9千万円の調査した結果を平成22年予算に反映しました。

1次評価の結果

■評価対象数 102事業 1,073事業

市民の満足度調査の結果

満足度	件数	割合
満足	1,073	100%

市民の皆さんへの情報提供

情報提供方法	件数	割合
ホームページ	1,073	100%

2次評価の結果

2次評価は、事務局で実施しています。140の事業について実施した結果を以下に示します。この結果は公表されません。

評価結果	件数	割合
満足	102	73%
改善	37	27%

外部評価の結果

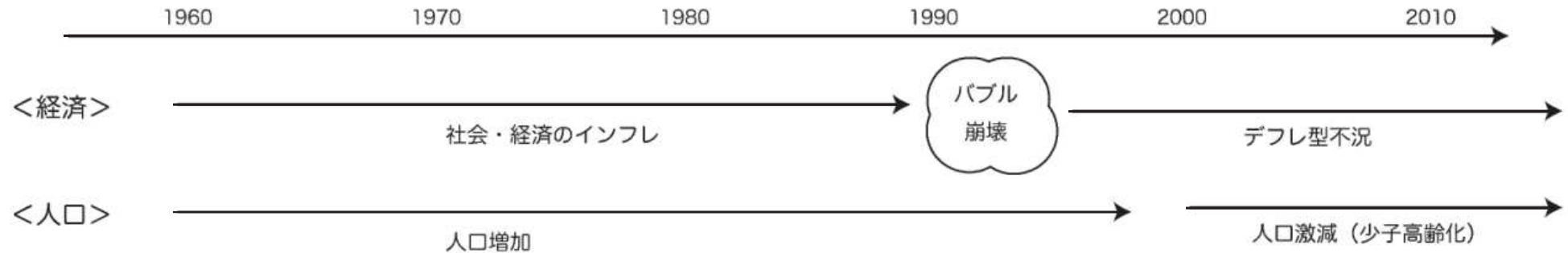
評価結果	件数	割合
満足	3	100%

現在の札幌市の文化芸術施策の総括・検証はこの「行政評価」のみと考えられる。施策が総括化している状況を考えると、「行政評価」が新しい時代の施策の策定に有効な役割をはたしているとは考えづらい。



文化芸術施策の振興のためには「行政評価」以上の新しい総括・検証システムの構築が必要なのではないだろうか？

2、社会のトレンドの変化とは？



**家庭、学校、会社、地域、国において
お金、土地、地位といった「有形バリュー」を
追い求めた時代**

社会や人々が、その存在をはっきりとは意識してこなかった**無形バリュー**（信頼、絆、思いやりなど）を大切にしようになった時代

つまり・・・

1. 高度成長時代における文化芸術施策とは、施設（箱もの）重視の施策が中心
2. それはそれで良いのだが・・・箱もの施策に関する総括・検証はされたのだろうか？（聞いたことがない・・・）
3. バブルの崩壊とそれに伴う社会構造の変化が起こる。社会や人々のニーズはお金のかからない（？）無形バリューへ。
4. 「文化芸術」が様々な社会問題（高齢者・少子化・教育・孤独...）を解決するキーワードに？
5. 高度成長が見込めない産業面でも「文化・芸術」は成長を見込める新しい産業としての期待感が・・・

時代はこのように大きく変化している。

過去の施策の総括と検証をベースに、新しい時代の、文化芸術施策の基本となるイメージを作成しなければならない。

**円卓会議が提案するのは、総花的な施策の提案ではなく、
（総括・検証を含めた）文化・芸術施策の基本システムです。**

・キーワード

平成 21.22 年度の円卓会議では、年々「総花化」していく札幌市の文化芸術振興に関する施策を見つめ直し、問題・課題を検討、整理しました。そして、すべての施策に通じる一つのキーワードを掲げ、そのキーワードの元に札幌市の文化芸術振興計画のこれからのための概観図を製作することにしました。

キーワードは、

「アート（芸術）の産業化」 です。

・なぜ「アートの産業化」なのか？

私たちが掲げるこのキーワードの根底にあり、目指していくものは、

文化芸術施策がスムーズに循環するための基本となるシステムの明確化、確立です。

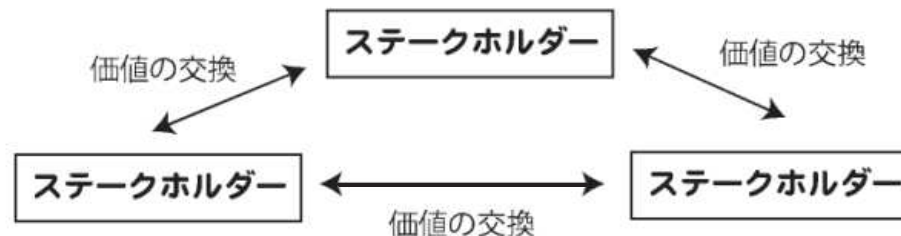
文化の基盤の一つであるアートにあえて「産業化」という視点を持ち込むことによって、良い意味でのビジネス的な視点や明確なシステムを作成し、文化芸術施策が無駄なくスムーズに循環していくイメージを作ります。

・私たちが考える「アートの産業化」の定義とは？

単に、アートが産業になるという経済的な側面のみを指しているわけではありません。

ここでは、「産業化」に「ステークホルダー（利害関係者）間で行われる価値交換」という意味を含んでいます。

つまり、アートに関わる人々の間に明確な「価値交換」の関係性を見る。というシステムの構築の基礎になるものです。

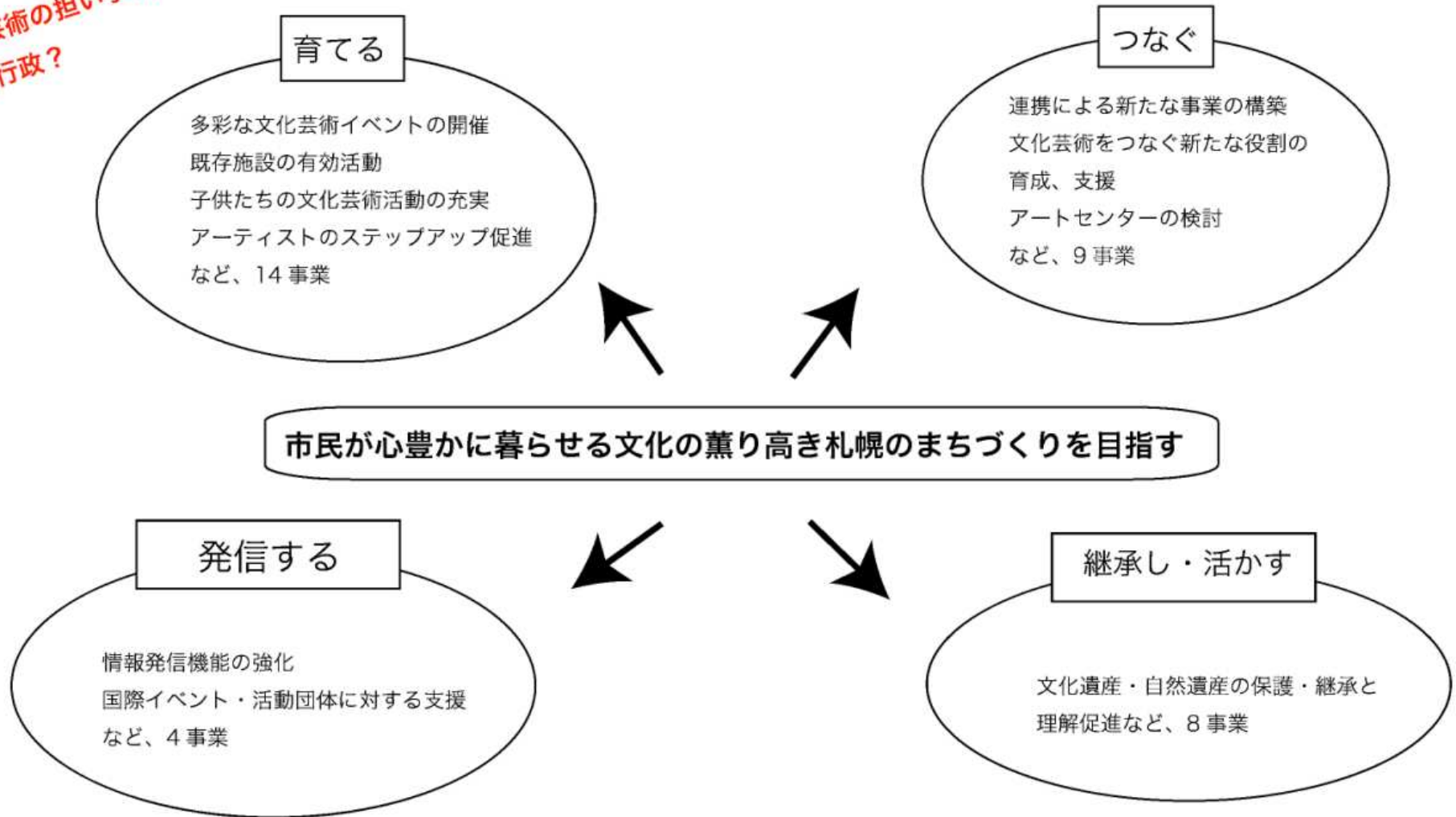


今までの文化・芸術施策の概観図

4つの基本目標のもと、様々な施策を提言。
それぞれの関連性が見えない

例えば平成21年『札幌市文化芸術基本計画』であれば札幌の文化芸術を「育てる」「つなぐ」「発信する」「継承し、活かす」という4つの基本目標のもと、様々な施策を提言しています。
4つの目標自体と個別の施策に関しては、素晴らしいものばかりでそれなりに納得できるものなのですが、やはり総花的すぎて、これらの目標や施策がどのように関連づけられ札幌の文化芸術の振興に繋がるのか？が見えてこないのです。

文化・芸術の担い手が見えない
市民？行政？



・ 円卓会議が提案する新しい文化・芸術施策の概観図

文化芸術を担う側として

1. 行政

2. 市民

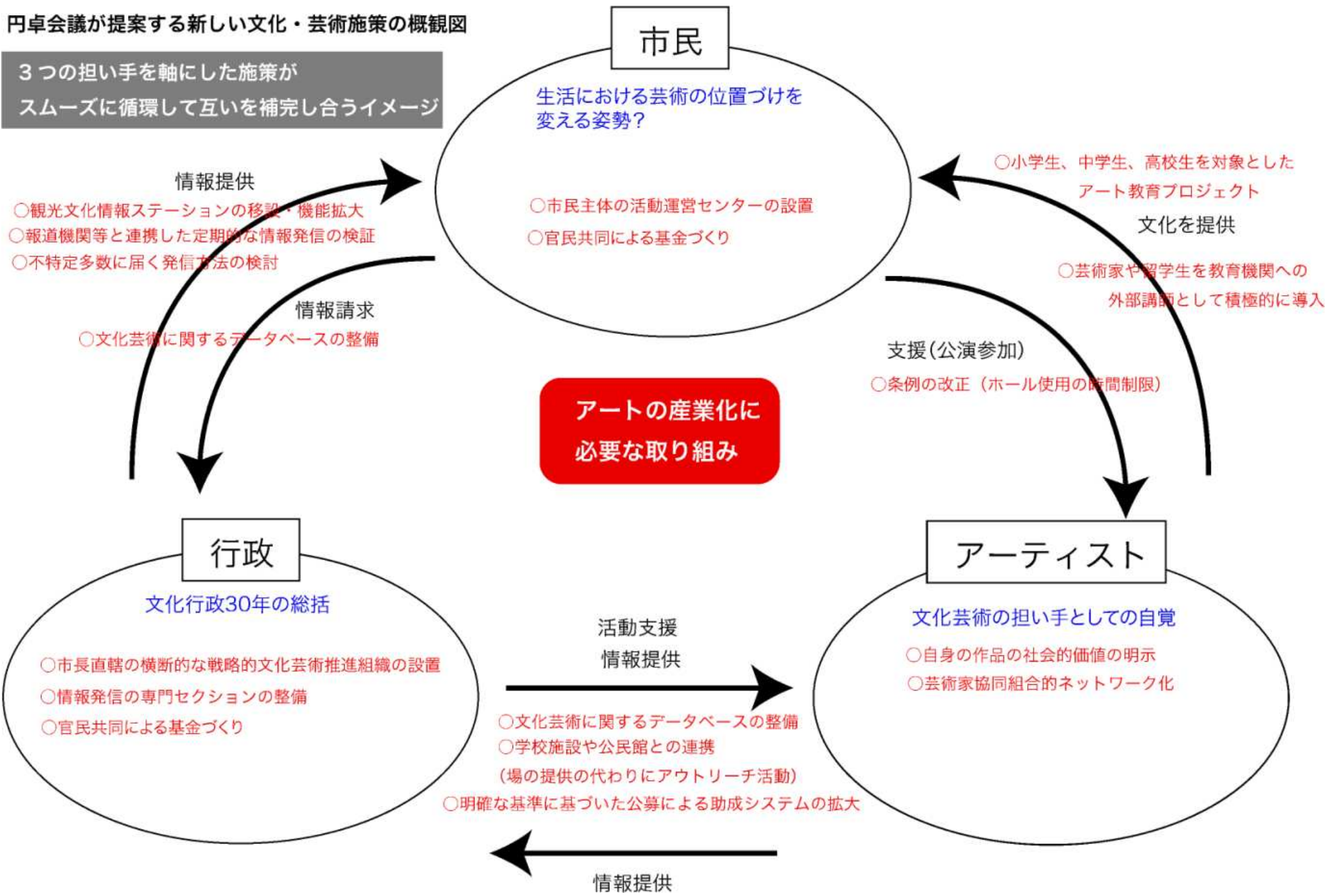
3. アーティスト

という3つの視点から「アートの産業化」に必要な取り組みを組み込んだ概観図の作成にあたりました。

アートという「産業」を担う3つの視点・立場から「提供・支援」「情報共有」という循環システムの核となるワードのもと、様々な施策が有機的に展開されるイメージを築き上げます。

円卓会議が提案する新しい文化・芸術施策の概観図

3つの担い手を軸にした施策が
スムーズに循環して互いを補完し合うイメージ



最後に。

今回、提案した「新しい文化・芸術施策の概念図」を実現させるために必要な『環境整備』について

すぐにでも始めるべき施策を提案いたします。

(1) 文化芸術に関するあらゆるデータを蓄積し、データベースとして提供できるようにする。

- ・過去を知り、未来に活かすデータベース
- ・データベースが、(2)の政策立案に資する。

(2) 文化政策の全体をコントロールする部署を作る。

- ・行政から独立した組織が、長いスパンで文化政策をコントロールする。
- ・例えば横浜市は、市の情報・文化に関する規模と中枢性に関する指標を設定 していて、政令市間における自らのポジションを把握している。札幌市も文化芸術のパフォーマンスを測定するための独自の指標を設定してはどうか。

(3) 札幌市の文化状況をいつでも把握できるような、基礎データ調査システムの構築・大学との連携

(4) 札幌市職員と民間専門家も入った文化政策立案のグループの立ち上げ

- ・実施担当部局職員は立案段階から、同等の立場で参加必須と考える。

(5) 上記のグループによる定期的な事業たな卸と新規政策立案

- ・なるべく早くに、一度文化専門機関(シンクタンク?)による札幌市の文化状況に関する調査と評価をしたら、よいと考える。
- ・これも5年に一度程度は実施すべきか。